

月別アーカイブ【2010年8月】

メールとニュース

2010年8月31日

「富山県子育て支援センター連絡協議会 設立総会 研修会」に参加している長男から午後1時前メールが入る。

シンポジウム

「子育て支援センターの役割と課題」

講演

「これからの子育て支援センターの役割とその専門性とは何か」

武庫川女子大学 准教授 倉石哲也

かつて研修会の講師として、山口においで頂き、私もお世話になった事がある先生である。

上記研修内容であるが、メールに講義内容の簡単なレポートが添付。

「いかに地域と連携をはかって子育てをサポートするか」

「保育園だけじゃなく、医者、学校、自治会、ボランティアサークルなどと手を携えるか」

「暮らしにくさ→子育てしにくい→育児不安 その根本をいかに解決していくか」

など、箇条書きに添付してあった。

みんなが、一人の市民としてフラットな関係で、地域の現状を補完しあう。

少しずつ、持ち味を活かしていけば、まちは必ず良くなる。

この原点が育っているかどうか、そのまちの未来を決める。

夕刻、民主党代表選、実施のニュースが入る。

本当の大人が少なくなったなあ実感。

責任を取ろうとせずに、権力を取ろうとする。

その姿に民意は離れるばかり。

宙船

2010年8月30日



いつか、どなたかが歌ってくれた宙船(そらふね)。中島みゆき作詞作曲である。

私たちの世代には、中島みゆきの曲が合うのだろうか、心情がとても理解

できる。

「その船を漕いでゆけ おまえの手で漕いでゆけ
おまえが消えて喜ぶ者に おまえのオールをまかせるな」

大変な困難を乗り越えた友人夫婦が今日は歌ってくれた。
二人でその困難を乗り越えるときのテーマソングがこの歌であったことを初めて聞く。

私たち夫婦にも当てはまるし、「防府」にも当てはまるのではないかな？

真似事ではない、防府という船のオールは他の市のやり方にはまかせられない。
私たちの手で漕いでいけるふるさと「防府」を願う。

しっかりと酔った。最後は「サライ」の大合唱。ペルシア語で、旅、宿の意味を持つとウィキペディアに書いてあった。

安心して帰れるところ、ふるさと、我が家(宿)があるから、旅は楽しい。

ラストのラストに、家内と二人で中島みゆきの「時代」を歌って本日は終了。
自分で初めて歌ったこの歌もジーンとききました。

市民体育祭

2010年8月29日



第48回市民体育祭があった。我が家の長男が、中関地区男子バレーボールチームの監督で出場。なぜか、監督である。理由は明確。この体育祭は20歳代、30歳代、40歳代と出場人数枠が決められている。20歳代はアタッカー優先のチーム編成のため、セッターの長男は練習要因も兼ねて監督ということになったらしい。

結果は、華城地区と決勝戦。2-0で勝ち優勝。去年は豪雨災害のため中止になっていた大会であったが、一年ほど、間はあいたが連覇。

地域にお役に立つ、固い言い方をすれば地域貢献。いずれにしても、元気でふるさとを盛り上げることは本当に大事なことだ。

実は、私もこの大会バレー男子の部に出場したことがあることをご存知の方はいらっしゃるだろうか？これは、本当の話です。その時は確か2回戦で負けた記憶が……。

大学に講義に行ってきた

2010年8月28日

神戸子ども総合学院に講義に行く。20名ほどの受講者であるが、新たな保育、教育を求めて、真剣さが凄い。私の担当はトライブラリーとプロジェクトに基づいた教育メソッドである。

3時間の集中講義であるが、いろいろなまちの、子育て支援、障害のある子どもたちへの支援、現状もよくわかる。大都市の悩み、地方の悩み。数々の意見も交錯したが、防府市はまだ多くのチャンスは残っていると再確認。内むきの政策ではなく、外向き、前向きの政策に転換することと、それを支えるスタッフの意欲にかかっている。5時過ぎ、六甲の山腹にある学院を出る。今夏、初めて、爽やかで心地良い空気に触れる。

日本で最初におもちゃライブラリーを創設されたのが辻井正先生。先生との共著「おもちゃの宅配便」が舞鶴市で話題になっているという。舞鶴市の子育て支援担当の方が、手垢で擦り切れるほど読み込み、虐待問題に活かしたいそうである。

「法律で、虐待のある家族の家の戸は開けられない、限界がある。」との思いからおもちゃを手段として、子育て支援に関わるこのスタイルに関心を寄せていただいていることに感謝である。

北欧研修に行きませんか？

2010年8月27日



早朝7時過ぎ、白鷗大学荒井教授より電話。いつも、先生の電話は朝7時過ぎ。先生曰く「確実にあなたをつかまえるのには、この時間帯が一番。」だそうである。何ともありがたい言葉である。開ロ一番「スウェーデンが取り上げられてきているね。テレビにも(テレビ朝日系スーパーモーニングで、3日連続、税金と安心～閉塞日本の問題を北欧に探る～)でてるしね。本家としてはここでがんばらなくっちゃ！」と気合の入った声。

「本家」というのには、先生の歩んでこられた思いがある。過去7度北欧研修のお伴をし、そのおりおりに語っておられた言葉にその意味がよくわかるのだ。

「昔は、(先生が学生の頃、約50年前?)スウェーデンといっても、だれも見向きもしなかったよ。むしろ、興味本位に扱われてね。行くのにも時間がかかったんだよ。」

他にも多くのご苦勞をされてきたこととお聞きしているのだが、いまでは、厚生労働省の方が北欧特にスウェーデン・ストックホルムのことになると、先生に尋ねてくることが多いのである。

ライフワークとはこのことであろう。

今後のゼミナールの打ち合わせの後、「だから、来年8月の今頃から、11日余り勉強しに行こうよ。ストックホルムを中心にして、ほら、中央駅の前にSASのホテルがあったじゃない。昨年改装して、あそこは移動に便利がいいからそこを押さえてね、少人数で勉強に行こうよ。前回の、老人施設の見学実習あれもよかったよね。子どものことだけではなく、そういうところもいれて、これからのこともあるしね。」

私も来年夏あたりに研修に行くといいと思っていたので、即座に賛成。これこそ比較文化論の実践である。

よく山口市、周南市、防府市との比較をブログに書くが、根本的には世界的な視野での比較が大事なのである。

「円高不況。責任者や大臣などは外遊。」

そのような記事が朝刊にあった。

今年の夏も、多くの国会議員が外遊(正確には海外研修・視察?)に行くとのこと。

国の仕事で海外に行くことは、国会議員として当然であるが、議員になってから、研修で、しかも団体でいっても私はまったく意味がないと思うのだ。

おそらく、その国の本音の言葉は聞けないのではないだろうか?相手の国の方々も、肩書きだけでかまえてしまうからである。

そこに気づいているかどうか、議員や首長の資質の一つであるとずっと思っている。

かつて、オランダで、レンブラントの有名な「夜警」がある美術館に研修の合間を縫ってギリギリの時間で飛び込んだことがある。

堂々と、本物を人の手に触れるような位置(当然触ってはいけないが)に飾ってあるのにも感心したが、オランダの風土がそうさせるのか、光と影をものに見事に使った作品に感動していた時のこと。

ガヤガヤとした雑多な気配に、静寂な美術館の空気が一変。何事かと思うと日本の議員の先生方の一団。基本的に黒っぽいスーツ、派手なネクタイ、ほとんどの方は絵にはあまり関心がないようで、添乗員とお付きの方と一緒にドヤドヤと通路をわがもの顔に歩いて去って行かれた。

同じ日本人として、これほど海外で恥ずかしい思いをしたことはなかった。

「美術館ぐらい群れないで一人ひとりで歩けよ。」率直な感想である。

ちなみに、オランダの教育の根底にあるのは「自立」。

私は、議員さんが、或いは首長さんが海外視察に行くことには大賛成である。必要に応じては県・市の職員も派遣してもいいのではと思っている。むしろ、これから国際的な流れの中で、国も地方も対応していくには、トップリーダーやシンクタンクの情報収集能力はとて必要なものであるはず。

実際、企業のトップは大変な思いで、あちこちを飛び回り、情報を収集し、会社に生かそうとしている。

ただ、思うのは議員さんになる前に、ある程度は、自己研鑽されていたらいかがでしょうか?ということである。議員や首長になることだけが目的の方があまりも多いこの日本。そのための努力?はされるがまちや未来の為の思いは皆無。だから、当選後やりたい仕事かわからないから、理念がないからもめる。

結論として、公的業務ではなく自己の研鑽であれば、自分の財布で行かれたらいかがでしょうか?ということなのである。

反対に、明確な理由があれば海外研修の期間・日数は大らかに認めていくことが必要だと考える。当然、政策にどう生かしていくという意見を述べる報告会は必要不可欠である。

最近、チェックが厳しくなり、不自然な海外研修は聞かなくなったが、必要なことは自分で行って調べる、自分の行きたいところに行く、そのぐらいの気概がほしいのだ。

話を本題に戻す。

この国の未来予想図はいまや「北欧型」であり、とりわけ社会保障関係は、もうアメリカ型では埋まらないのではないだろうか。

これからは、私の歩いてきた道、学んできた道が、この国やまちの未来であると確信している。この思いをもっともっとふるさとに伝わる努力をしていきたい。

いま、民主党党首選がにぎやかになってきた。

興味本位に、そして直近の利害ではなく、次の世代に誇れるこの国の方向性を、はっきりと示した民衆党党首選になるかが、この国の分かれ目になるであろう。

保育園の誕生会の後、山口市で河村健夫元官房長官にお会いする。

「教育と福祉に国家戦略がないから、国の全体像が見えない。」

そのような内容のお話であったが、その通りであると思う。

「教育・福祉は与野党の枠を超えて。」の言葉も印象的であった。

安全・安心策、いわゆるセーフティネットを張ることで、経済活性化の元気も出てくるのでは。

少し風が？

2010年8月26日

今朝は、少し風が吹いていた。

猛暑がわずかに過ぎ去っていく気配でもあった。

午後は、防府南ロータリークラブの例会に出席。

広島、三次ロータリークラブ前田茂ガバナーの卓話を拝聴する。

印象に残ったのは「次世代を担う青少年への奉仕活動」を強調されていたことだ。

次世代のために何ができるかを考え、行動に移していこうとの呼びかけではあるが、反面、具体的に行動をしていかなければならない危機感を抱いているということであろう。

さて、国も防府も国民・市民感情を二分する案件で騒がしい。

ややもすると危機的な経済、生活の厳しさの認識が、公的な職に就いている方々には希薄なのではなかろうかと思ってしまう。

厳しい現状だからこそ、みんなが、夢のある明日に向かって励ましてあっていけるような、政策、メッセージが望まれている。

少し風が吹いてきた。風の吹く角度も少し違ってきたのだろう。

違う角度、幅広い角度で物事を見ていこうとする度量が試されていると思うのだが。

きょうもまた一家族、若い子育て世代が、現在住んでいる防府市ではなく山口市に家を建てるという。山口市と生活対策の遅れ、格差がそうさせたようだ。

クラスの子どもの姿は担任の姿

2010年8月25日

きょうは、午後1時30分より防府市役所1号館3F会議場で、防府市幼・保・小連携教育研修会が実施された。防府市教育委員会の主催で、学校教育課長あいさつの後、佐波幼稚園清水園長先生の指導講話「幼・小連携を進めるにあたって」を皮切りに、松崎小学校岡田教諭が小郡の幼稚園に1年間長期研修されたその報告、防府総合支援学校中村教諭のアンケートによる小学校側から見た幼稚園保育園に望むものの報告があった。

研修資料には、趣旨として「幼児・児童の実態や指導について相互理解を深めるとともに、就学前教育と小学校の円滑な接続を目指した連携推進及び指導の充実・活性化を図る。」と書いてあるが、分かりやすく言えば、幼稚園、保育園、小学校がよく話をし、小学校1年生になる子どもたちや保護者のスムーズな小学校での生活を支援していこうというものであろう。

近年「小1プロブレム」といった言葉もあるように、入学して、椅子に長時間座っておれない、多動、奇声を発するなどの不適応を起こす児童が増えてきたため、小学校と就学前(幼稚園・保育園)教育機関が互いの理解を深め、少しでもつまづきを少なくしていこうとするこのような研修会はこれから意味のあるものになっていくはずである。

当然、この研修会を実施したことで、すべてが解決するわけでもなく、さらに胸襟を開いて、本質に迫る、実態に即した意見をもとに、具体的に変わっていかなければならないことは言うまでもない。

共に寄り添い、良いところを受け入れて、互いが変わっていこうとするスタイルが求められているのだ。折角なら、防府市独自のスタイルの幼保小連携を造り上げる気概があればとも感じた。

特に心に残ったのは岡田教諭が幼稚園に一年間研修に行かれ、「自分の教育の視点が変わった」との報告は、素晴らしかった、きょうの標題「クラスの子どもの姿は担任の姿」は先生の報告からである。

この視点・感覚がこれから特に大事なポイントと実感。

クリーン・テック

2010年8月24日

早朝というより未明に、アメリカ、シリコンバレーに住んでいる友人よりメールが入る。

「クリーン・テック、ヘルスケア関連が今後、日本が牽引できる産業だと思う。」と、記した後、「お金を出しても買えない自然。防府には・・・市が率先してやることで、民間企業へのイメージ波及。」

さらに、スマートグリッドや水素燃料についても言及し、次期につながるふるさと防府への構想を伝えてくれた。

ちなみに、クリーンテックとは『天然資源の消費、大気への温暖化ガス排出や廃棄物を減らし、再生可能な資源を活用するさまざまな技術、製品、サービスプロセスのことです。グリーンビルやハイブリッド車をはじめ、太陽光・風力発電、電力インフラを大きく転換させるスマートグリッド、「ウォーターショック」に対応する水のろ過・浄化技術など、クリーンテック主導経済が世界を席卷しつつあります。その高い成長性に着目したシリコンバレーなどの目ざとい投資家が、「次の金鉱」として莫大な資金を投資しています。』（クリーンテック革命より）とのことであるようだ。

彼は、7月のメールで「アメリカの景気が悪く、これから日本も厳しい。」と伝えてくれていたが、今まさにその通りの状態になっているではないか。きょうの日経平均株価が終値も9,000円を割ったと報じられ、円高の直撃をほとんどの企業が受けている。

ただ、彼のメールでありがたく思ったのは「お金を出しても買えない自然」の一言である。

その生かせる自然が残っていることを、ふるさと再生に生かすチャンスととらえ、官民一体となって、次世代への投資の為全力を尽くす時であることを、外からみている防府人はやきもきしてきているに違いない。



眼鏡を変えてみました。

時々これもかけてみようと思っています。

スウェーデン・富の再配分ができる国

2010年8月23日

先週、水木金と3日連続でスウェーデンの特集をやっていた。

テレビ朝日系の朝の番組であるが、消費税25%のこと、年金のこと、

議員定数のこと、など含めて将来この国が向かっていくであろう方向を、結構明確に論じてくれていた。

私自身、北欧民主主義から学ぶところは大事だと思っているので、参考になったが、すでに知っていることも多くあった。

しかし、朝の報道番組で、しかも3日連続で、ノルディックスタイルを取り上げられる時代になった事は率直にとてうれしいと思う。

防府青年会議所を卒業した40歳からではあるが、白鷗大学名誉教授荒井 洌先生に導いていただき、幾度となく北欧を訪れ、国内でもゼミナールを続け、学び、研鑽してきたものが、具現化に向けてわずかずつではあるが、動き出した感がするのだ。

ただ、今となっては残念に思うことは、どのまちよりも先駆けてこのスタイルで防府のまちの将来像を示したかったことである。

安全・安心でおじいちゃんおばあちゃんから子どもたちまで社会保障が整備された、どんな世代からも選択されるまちに持っていきかけたことである。

北欧のレベルまでには多くの事情があり、時間がかかると思うが、いち早くその道筋をつけるだけでも、都市間競争に勝ち抜いていけるふるさと防府になるのではなかろうか。

番組の中で、「消費税25%はどう思うか？」の問いに「25%がどうかというより、国民がそれを納得している。」との答え。

「税金を取られている。」との感覚ではなく、「お金を国に預けている感覚。」だそうだ。

国を信頼し、支払った分以上に国が後々自分たちが困った時に保障してくれる安心感があるのであろう。

2年前にストックホルムでのゼミナールで、「この国は、富の再配分がしっかりしているから。」と同世代の女性が誇らしげに教えてくれた。「あなたの国とは違うでしょ。」そんな思いもこもっていたと思う。

とにかく公的な仕事、特に政治家には徹底的にクリーンさが求められており、私が以前現地にて聞いた話では、ある有能で、将来を嘱望されてた大臣が夕刊紙を秘書に買いに行かせたことで、失職となったそうである。公私の区別をきちんとする、税金の使途をきちんとする、当たり前なのが当たり前になっている。

そのような政治風土がこの国や防府にも求められている。

名ばかりの「改革」ではなく、まだまだすることがあるはずである。

夕刻、保育園の園庭。

「先生、ブログ見ちよるよ。」と少々暑さにバテ気味のお母さんから声がかかる。

看護師さんだけに、「若い人も熱中症で運ばれてきたりするから、先生も気をつけんとね。」と、ありがたいお言葉。感謝・感謝である。

車いす

2010年8月22日

母が車いすでの移動が主になり、約4か月。

介護保険にもずい分とお世話になり、実際に使う側になれば何ともありがたい。

また、ヘルパーの方々や介護に携わる方々のバックアップには頭の下がる思いである。

さて、今日の夜は、家族全員で夕食に出かけようということになった。

本当に久しぶりのことである。

しかし、今までとは違い、母が車いすなのだ。外食に出かける場所が限られる。

急な思いつきでもあったために、もっともスムーズに食事ができる場所を考えたがなかなか思い浮かばない。

「あそこは、階段がある。」「座敷にあがるのは難しい?」「静かに話ができるほうがいいだろう。」「テーブルの高さは?」「固いものより軟らかい食べ物の方がいいだろう。」「トイレの広さは?」

いろいろな心配ごとが、浮かぶ。

結局、ホテル関係であれば取りあえず当面の心配は、クリアできるということで、話が一致する。

車いすで、自動車まで連れて行き、助手席に乗せ、後部座席は父と家内、そして私の運転で出発。子どもたちは、別の車で後ろをついてくる。

いつもは、病院とデイサービスの往復しかないため、きょうは、反対側の中浦の坂を通過して出かけることとする。

家族とともに出かけることは、本当に嬉しかったらしく、車内で涙しながら中浦の海に出、マツダ西浦工場を過ぎ、市内方面に向かう。

車の乗り降りをみんなで手伝い、車いすを押して、なんとか初めての家族での外食ができた。

「きょうは、おいしそうに食べよったね。」と娘が母の様子を帰宅後話す。

防府で、車いすで入りやすいお店があったら教えていただけませんか?

防府には、やらなければならないことが山積していると思うのですが、方向性が本当にずれていると思いませんか?

暮らし・生活の具体的なことを、少しずつでも、変えていくエネルギーが今こそ求められていると思いませんか?

国立山口・徳地青少年自然の家

2010年8月21日



キャンプ二日目。早朝から、鳥の鳴き声とともに、子どもたちの声。

いつもの生活とは違うスケジュールでしっかり遊んだこともあり、よく眠っていたのだが、子どもたちのキャンプの朝はやはり早い。

人も自然のリズムと同調するのだろう。

朝の集い、朝食。昨日、和紙で作ったハガキにお便りを書き、大自然の中で交流会。

にぎやかな声のとぎれることがない。

初めてサポートに参加してくれたお父さん、「こんなに大変とは思わなかった。幼稚園保育園で、こんなキャンプをやっているところありますか？子どもたちには、いい体験。20年近くこれを続けてこられたこともすごいし、これからがんばってください。」

一緒に身近に見てもらえると、幼児の教育保育の素晴らしさと困難さが理解してもらえる。一人でも多くの方にこれからのスタイルを理解してもらわないと。

さわやかに山から下りてくると、「市議員定数半減」で、市民団体なるものが記者会見の記事。

「市議員の任期はまだ二年以上あるのに、どうしてこう急ぐのだろう」と率直な感想。

しっかりと議論を深めれば自ずと結論には向かうはず。

市長給与と半減と退職金全廃は、今だなされておらず。これこそ議会の議決がなくてもやれるのではないかと思うが、そこは「たなざらし」。なんとも不思議な状況である。

体験の風をおこそう！

2010年8月20日



中関幼稚園、錦江保育園、錦江第二保育園、年長組さん、総勢100名を超える子どもたちと、今日から一泊二日、国立山口徳地青少年自然の家でキャンプである。

サポートのお父さんたち15人お母さん2人、そして職員スタッフと大所帯ではあるが、子どもたちの成長には欠かせない貴重な体験となる。

徳地にキャンプの場所を変更して17回目となる。秋吉台時代を含めて、通算20年を超えて、このような機会を継続してできていることに感謝である。

「体験の風をおこそう」と青少年自然の家のスローガンが玄関の前に立ててある。

まさに、求めているのはこれなのだ。

午後から、紙すきをして、はがき作りである。あす朝、お家の方々に子どもたちの思いがこもったメッセージを書くためなのであるが、みんな汗びっしょり。徳地も予想通りの猛暑で、すいた紙を少しでも早く乾かすためのアイロンがけ担当のお父さん方は、もう大変な状態である。

「今までにアイロンがけをした全部を含めても、今日のほうが多い。」

それを聞いた隣にいたお父さんが「あんたはええねえ。うらやましいわ。」

ワイワイがやがやのうちに、それもすみ小休憩。

自然散策などで過ごし、夕べの集い、お風呂、夕食そして楽しみにしているキャンプファイヤーである。

火の神の登場のシーンでは、静かな物音さえも聞き逃さないよう聞き耳を立てている。松明を持った女神を従え、山影から降りてくる火の神に、みんな目を丸くしシーンとなる。

火の神の口上のあと「点火」の掛け声とともに、まるで空中から降ってくるように、火のついたアーチが木組みに飛び込み見事に点火。

感動の一瞬が今年も子どもたちにプレゼントできた。お父さん方のサポートに心からの感謝である。

あとは、火を囲んで歌や踊りのオンパレード。夏の一夜だけれど、生涯にとってとても大事な一日を刻んでくれることを心より願う。

夜空を見上げれば、満天の星。その天空の星の中にキャンプファイヤーの火の粉が吸い込まれるように溶けていく。

天と地が一つになった瞬間だ。

「生きていく力はやはり自然からいただくものだ。」と実感。

明日もさわやかに頑張るぞ！

散髪していると！！！！

2010年8月19日

散髪していると、

「どこかで、お見受けしたと思いましたが、また、頑張ってくださいね。」と、お隣の席の方から声をかけていただく。

「防府の、福祉、医療など、私自身が現場にいるだけに不安感がありましてね。山口市、周南市と比べて随分と格差がついており、早く立て直しを図らないと、防府は人々から選ばれない、選択からはずれるまちになりそうで。」とお話する。

「そうそう、僕が知っているだけで3人若い方が山口に家を建てるといふんよ。訳を聞いたら、子ども関係の行政対応が全然違うから」と、店の主が教えてくれた。

ショックである。そのようなことにならないか不安感もあり、市長選に出馬したが、なかなかその思いは受け止めてもらえず。

不安に感じていたことが現実になりつつある防府。

若い世代が隣町に家を建て始めたら、防府の立て直しはもうできなくなるであろう。

お店屋さんますます来客が減ってくるであろう。市民税の収入も当然減る。

幼稚園保育園の入園児も減っていくだろう。お茶もますます売れなくなっていくであろう。おもちゃやお菓子、服も売れる数が減っていく。

誰が見ても大変な状態にある防府なのである。

「国のデフレ以前に防府はすでにデフレ状況にあった」この認識は前にも書いたのだが、早急に考え方を転換しないと。

市議会議員半減などの論議よりも、生活・経済対策を打たないと沈没しそうなふるさとの状況を一人でも多くの市民の方に気がついてほしい。

きょう、大変尊敬する先輩と電話にてお話しをする。5月10日、防府・徳地 JA 会館での後援会の時、壇上から、そのお姿が特によく見えたのだ。何よりも、その先輩に私の思いを聞いていただいたことがありがたく、お盆までにはお伺いをし、お礼を言いたいと思っていたのだが、すれ違いとなり、きょうの電話となった。

電話の最後に「ブログ見ているよ。」と、ありがたいお言葉。

明日からは、幼稚園保育園年長組さんと一泊二日のキャンプである。

言うに言えない苦労もあるのだが、「自然の中で学ぶ」ことの大事さを実践するには、もってこいである。

徳地青少年自然の家に場所を変更して今年で 17 回目となる。

それまでは、3、4回秋吉台に食料を持参して行っていたのだが、0-157 が問題になって以来、場所を変更したのだ。

猛暑に配慮し、今年も思い出に残り、子どもたちの生涯の基盤となるような素敵な時間を過ごしたい。

市役所に行く

2010年8月18日



久しぶりに、防府市役所に行く。

午後 2 時から、防府市児童環境づくり連絡協議会に出席。

議題は、防府市次世代育成支援行動計画に基づく平成 21 年度事業実績及び平成 22 年度事業の取り組みについてである。

ここまで書いて何と漢字の多いことかと、自分でも思うのだが、行政用語が入るとこうになってしまう。

昨年の事業実績や今年度事業のことについて、健康福祉部長、子育て支援課、学校教育課、健康増進課も出席し、会長の宇部フロンティア大学白石教授の進行で 20 名ほどの会議であった。

二時間弱の会議であったが、今回は、真剣なやり取りが続いた。

私自身もなぜか今までと気構えが違っていただのかもしれない。

数千円の手当も出るのだが、これも貴重な税金である。出席したからには、子育て環境づくりのために、未来型提案をしなければならないと思うのだ。

これからの取り組みについて、防府ならではの事業は？との質問も飛び出す。学校教育についても支援員の数について山口市との比較も尋ねたが、なぜか山口市などと比べて、防府は特別支援の先生の人数は、各段に少ないのである。とりわけ障害を持っている子どもの保護者には大事なことであり、そのことの充実も依頼する。

私自身は、防府の特徴は、健康増進課や子育て支援課、そして子育て支援センターなどとのコミュニケーションが良く取れていることだと思っている。

第一線の現場は、虐待、不登校、障害などさまざまな要素に身を粉にして対応している。

このような報告書は、数量で測ってしまいがちであるが、見えにくい部分の良いところも積極的にアピールしていく姿勢も市政であろう。

夜は、天神ピアにてコール唯可(ゆいか)の練習。

本日の写真は、老人ホームに中関幼稚園のコーラスと一緒に昼から訪問演奏に出かけた、家内です。

続・長州侍

2010年8月17日

「昨年披露パーティが宇部全日空ホテルで開催され、芋の植え込みは休耕田などを利用し、芋堀などはボランティアで行い、県の開発センター(正式名称は忘れまして)と一緒に開発」

「地産地消品として醸造工場を宇部につくりたい」

8月12日のブログに、地産地消焼酎「長州侍」の味の感想を記すと、贈り主の友人のご主人よりメールにて、早速詳しい地産地消状況を教えていただく。

思いを込めて、自分のまちのことを考え、自分たちで動こうとしている。この国の将来が見えづらい今こそ、足元から、地道にやっっていくことに意味がある。

防府にも「天神鱧」がある。昔から、夏になれば、鱧の湯引きは食卓に上がっていた。(私は、つけ焼きが一番好きであるのだが)

今は、市内料理店で食べることはできるし、実際に東京などからも「天神鱧」が目的で防府に来られる方もいるそうである。

また、お土産に持っていくのに「天神鱧のちよっと雑炊」は持って行きやすい。私とすれば、重さと値段が手頃なのだ。

防府、新田にある麒麟協和FD(株)で造られているので、まさに地産地消食品である。

「味もいい」と後で、ありがたい感想を聞くこともしばしばである。

まだの方は、是非お試しを！そして、お土産の一つに加えられるは。

ベルリンの壁

2010年8月16日



ベルリンの壁が崩壊した直後、ドイツに行った友人がいる。ベルリンの方にも行くというので、無理を言って「ベルリンの壁」を持ち帰ったもらったことがある。

当時、中関小学校 PTA 会長をしていたこともあり、児童にその現実を少しでもわかってもらえればとの思いであった。小学校には、今でもどこかに、そのベルリンの壁があるにちがいない。

数年後、やっと自分でベルリンを訪れることができた。フレーベルの生家や世界で初めてのキンダーガルテン（幼稚園）を訪ねて、その哲学を学ぶためであった。

旧東ドイツ地帯にある、ワイマールやバッドブランケンブルクを歩くうちに、妙な感覚に襲われた。

旧東ドイツは、経済破綻をきたし、西ドイツと統合せざるを得ない状況になるほど、生活はよくないことをずっと聞いていたからだ。

しかし、人々の顔は明るい。夜散歩をしても、家の窓の一つには明かりがつけてあり、外からみるととてもおしゃれなのである。

「日本の生活の方が、もっと切実で厳しいではないか？今までの我が国の情報は嘘ではなかったか？」と感じたのだ。

私の教育改革の始まりである。

国の情報だけにとよっていても、実態が見えなくなる、自らが動き、比較文化論的に現場を歩き、良さと違いをかぎ分けていく。

8月16日、まだお盆の雰囲気が残る日本各地。けれども保育園はきょうも子どもたちが、暑いさなか通園してきている。

8月15日

2010年8月15日





きょうは、上本町、新地、南山手、三地区合同の盆踊り。

昨年は豪雨災害により中止になった為、今年は二年分の位牌が並んでいた。

おじいちゃんを亡くした青年は、「涙が止まらん。」といいながらお焼香。

よく聞けば「じいちゃんとけんかせんにゃあえかった。」「今はじいちゃんのええとこばかりみえる。」とのこと。

孫育てをしっかりとってお亡くなりになられたなと思う。生き方のすべてを、お孫さんに伝えられたことは、そのお孫さんをみていてよくわかる。思いは残るのではあるが、ある意味見事である。

子どもたちと一緒に行くが、友人たちと久しぶりに会ったようで、話しこんでいる様子もお盆の一コマだ。

そういえば、8月に入り、本当に多くの方がいろいろな話を聞かして下さい。いつもとは全く違う雰囲気、伝えておかねばならないような気合を感じる。

ある方は、学徒出陣の話。

学年は4月生まれから3月生まれが一緒である。しかし学徒出陣は1月生まれから12月生まれが一つのくくり。よって同級生の12月生まれまでは、一年先に召集。その方は3月生まれであったので、翌年7月に知らせが来て、9月入隊が決まっていたが、8月15日終戦となる。

「私たちは境目の年。一足先に召集された同級生は特攻隊などで十数人亡くなっている。戦争は絶対してはいけないこと、しかし、それと合わせて、先立って行った友達がどんな思いで死んでいったかを知ってほしい、伝えてほしい。

日本ために、肉親や、次の世代のために思って逝ったこともわかってほしい。今の日本は、ふるさとはそれに応えられる、胸を張ることができるだろうか。」

100歳以上の方が行方不明になっているこの国の現状も影響しているのだろう。できもしないことを平気で掲げて、選挙に勝てばいいとだけ思っている政治家の多さもあるのだろう。

その結果。漠然とした不安感であったものが、現実的な不安に変わってきたからでもあろう。

多くのことを話して下さいの方が本当に多い。おじいちゃんのことをしっかりと受け止めようとしている素晴らしい青年もいる。とにかく今はしっかりお話を聞いて力をためていく。

ゲゲゲの鬼太郎

2010年8月14日

NHK 朝ドラのゲゲゲの女房。

私はあまり見ることはないのだが、何故か家族にはブームになっている。

父母たちには、苦労時代が自分たちの時代と重なったらしく共感をび、家内や息子たちには、「ゲゲゲの鬼太郎」の漫画そのもからくる影響らしい。

もっとも、原作者の水木しげるさんのふるさと鳥取県境港市にある、水木しげるロードは、いま、大変な観光ブームという。

我が家のブームどころではなく、まさに地方にも人が来る、観光客が来る、まちおこしのモデル都市といえる。今朝も朝ドラを見た家内が内容を教えてくれ、再放送を見るように促された。

さっそく録画して、夜再放送を見ると、素敵な言葉が続々出てくる。

「子どもは自然の中であそばさんといけん。」

「生きることに必要なことは自然が教えてくれる。」

そういえば、今日お会いした関東方面から初盆で帰省された方が、帽子でセミをとってお孫さんにやろうとすると、セミを触ることができず、怖がって逃げ出したことを残念がっておられた。

「生きることに必要なこと」の基準を、もう一度自然という原点に戻すべき時期に来ている証しでもあろう。

放送の中で、水木さんの子どもが「お前のお父さんは妖怪を見たこともないくせに、漫画にしようそついている」と、いじめられていることを打ち明けると、

「目に見えないものしか信じないというのは間違っていると思う。人間は不思議なものたちに囲まれて生きている。」とさりげなくこたえるシーンがあった。

「目に見えないものを感じる、気配を感じる、不思議なものに気付く。」こんな感性を育てていくことが、本来、教育の原点だと私は思う。

お盆

2010年8月13日

お盆に入り、防府の市内も何となくのんびりムード。

その間を、かき分けるように、お盆のお参りに急ぐ。

初盆のお宅にお伺いすると、それぞれの家族の間で

それぞれの思いを持ってお迎えをされている雰囲気がよくわかる。

まだ、心のまとまりがつかず、何とかその日を一所懸命にやり過ごしておられる方。

地域の方に支えられていることを感謝しつつ、子育てをしながら、家族の在り方を問い続けておられる若いご主人。お孫さん、曾孫さんまでずらりとならんで、手を合わすことを大事にしようとされている方。

一人ひとりのお姿が脳裏に残る。私の原点の一つは確実にこのお姿があると体感。

きょうから、中関でも盆踊りがあちこちで始まった。子どもたちが集まりにぎやかなところ。若手がご年配の方を支えて、盛り上げようとしているところ。これも、持ち味。

お盆の時期だからこそ、聞かせていただいた貴重なお話もある。

お盆の時期だからこそ、じっくりと頭と体を通して過去現在未来を考えることが、防府にも個人にも必要だと思うのである。

長州侍

2010年8月12日



基本的に、というよりも絶対的に私はお酒に弱い。

学生時代から幾度となく鍛えるというよりも、鍛えられる場面は多かったのだが、強くはならなかった。

最近は少しばかりであるが、ときどき口にする。すぐ真っ赤になるのが、他人にはよくわかるらしい。

そんな私が「長州侍」という焼酎を頂戴した。

友人のご主人からのプレゼントなのだが、宇部産の芋を使用し、宇部の市長さんも、開発に関わった焼酎と、お手紙に添えてあった。

本日、その感想も伝えるべく、長州侍なる焼酎をいただいた。

私の感想はあまり当てにならないので、妻と長男も一緒に飲んだ。

「香りがよくて、のみやすくて美味しい。」これは、私の感想。

「芋の味がよく出ていて、おいしい。」これは、長男の感想

「酔いざめがいいねえ。」これは、妻の感想

ちなみに、長男と妻は飲むほうだ。

私のもう一つの感想は、食は文化だということである。

前述したことがあるかもしれないが、「日本スローフード協会」立ち上げメンバーの私としては、ここは大事なところである。

要は、地元の食と地酒はセットなのである。

その土地で収穫された食材と、その土地ならではの酒を大事にして、持ち味を生かした食文化をつくることはス

ローフード運動の原点である。

この度の市長選ミニ集会で、「文化を大事にしてください。」
と、よく言われた。

市長自ら文化に関わりを持っていく「姿勢」も「市政」のひとつだろう。

台風接近

2010年8月11日

早朝、中浦の海に行く。

思ったより、風が強く前かがみでないと歩けないくらい。
防波堤を波が超えている様子を不安げに話される地元の方。
続けて「きょうは、大潮じゃからのう。」

数年前の高潮の被害にあわれた方は、当時の様子を語られた。
「あの時は、二、三日前からずっと雨が降って、川はいっぱいになって
丁度、それが大潮と重なってねえ。」

被害のない状況で台風が去ってくれるのを願うばかりだ。

ふと、地元の方とお話をしている気がついたことがあった。

今の子どもたちは「大潮・小潮」という言葉を知っているのだろうか？
潮の満ち引き、干潮・満潮の様子の違いを知っているのだろうか？ということである。

この言葉は、私が幼い時、学校や遊びの中で、当たり前のように自然に使われていた。
近所のおばさんたちの会話にも、「大潮じゃから、貝ほりにいこうでね。」などと耳に入ったものである。
子どもながらに「どうも大潮のときじゃないと、貝はたくさん取れんらしい。」とか、自然に考える素地が生まれて
いたものである。そういえば、友達の中には汐見表などを持っていて自慢げに説明してくれたりしていた。

そんな子どもたちが、今、どのくらいいるのだろうか？

近年、海で遊ぶ子どもの姿をあまり見なくなったからそう思ったのかもしれない。
近年ではない。自分たちも親として子どもたちに、自然をどれだけ伝えられたかとも思うのである。

「教育」の基本は、やはり生活の中の体験・学びである。

「ごきげんよう」

2010年8月10日

夕刻のニュース。

徳山港に入港していた日本丸と海王丸が出港していく様子が映し出される。

マストに登り「ごきげんよう」と大声で挨拶をしながら岸壁から離れていく「登しょう礼」の姿は、やはり美しかった。

一昨日のブログでもこのことは書いたのだが、やはり盆前のこのシーズン見に行くことはできなかった。

風をはらんで、大海を航海していく帆船。相当な技術と訓練、そして度胸がいることだと思う。

昔から積み重ねたものを今に伝えようとしているこの練習船には、未来があると感じる。

まちも同じではないのか。

昔からの積み重ねがあるまちほど、現代に伝え、未来に残そうとするには、相当な努力がいるはず。

全国的な規模で動いている親しい先輩の会社がある。

優良企業なのだが、毎年のように設備投資をしているそうである。

全国区のレベルを維持していくには、技術革新をし続けていき、さらに日々の在り方が問われるとのこと。

全国レベルで、暮らしを変えていけるほど能力のあるまち「ほうふ」なのであるが、そのベクトルはいまだ未来を指していない。

帰ってこれるなら、帰ってこい！

2010年8月9日

昨日、帰省した友人と少しばかり談笑。

彼は、定年になったら防府に帰ってくると言う。

ふるさとに帰り、この防府のために、少なくとも

十年はお役に立ちたいと明確に言う。

18歳で防府を出て、東京や全国各地を歩いて、それなりのポジションも得ていながら、防府に帰ると言う。

「ありがたいな」と素直に思う。

話の中で、東京に行き、すでにふるさとの家を処分せざるをえなかった友人たちのことも話題になる。

しかし、その友人たちも、ふるさと防府への思いは熱いのだという。
出て行ったからこそ、気になる。胸を張って語れる防府になってほしい。
外から客観的に見ているからこそ、見えるものがあるようだ。

「本屋さんが減ったね。」とポツンと言う。本屋さんや図書館に
行けば、そのまちの雰囲気がかめるとも言う。

日本各地を歩いてきたからこそ、わかる感覚なのだろう。

「帰ってこれるなら帰ってこい。多くの経験を活用して、
一緒にふるさとのまちづくりをしよう。」

市長選を経験したからこそ、友人が真の友人になっていく。
すべてを無駄にしないで、生きていく。

ふるさとに心の距離が近くなる今の時期。

100歳以上行方不明の状況が、連日報道されている。
テレビの司会者が「誰がこんな日本にした。」と偽善者ぶって
しゃべっている。少なくとも私にはそう見える。

一人ひとりの心の距離を縮めていく作業が必要なこの国である。

港

2010年8月8日

帆船日本丸と海王丸がダブルで徳山下松港に入港。
今日、セイルドリルという帆を張る訓練が行われたことをニュースで知った。

二十年前、三田尻中関港に海王丸が入港し、セイルドリルをし、登しょう礼で出航した時は、思わず涙で見送った。

たまたま、ご縁があり入港に関わりをもてたこともあって、感動もひとしおであったのであろう。

その当時、次は日本丸の入港に期待する声もあったが、日本の誇る二隻の帆船が同時入港は、よほどのことが
ないとなしえない事と思っていた。

そのことが、お隣の港では、実現。
何ともうらやましい感じ。

海王丸の船長が「豊後水道をまっすぐあがってきて、一番入りやすい港は三田尻中関港。この港を大事にしなさい」と言われた。

その言葉の意味は、今の防府に生きているだろうか？

旧交

2010年8月7日



昨日は、私の小学校 PTA 会長時代のメンバーが集合。

久しぶりに旧交を温める。

「屈託のない話ができる場所はいいいね」みんながそう感じたひと時であった。

「また、年に一回ぐらいでええけど小学校に奉仕しようや」と、誰かが言い出すと、

「何ができる？」「難しいことは出来んから、窓拭きか草取りかのう」

「だったら、夏休み最後の一斉清掃に手伝いにいったら」

「そりゃあ、現役の PTA に悪かろう」

まだまだ子育て中のもの、孫が生まれておじいちゃん、おばあちゃんになっているもの、奥様をなくされた方など、当時と状況は相当変化している。

でも、他のために、次世代のために、自分たちができることで、ふるさとを支えていこうとする気持ちにあふれている。

目先のことだけではなく、なが〜い目で見たいこうとする大らかな気持ちが今こそ大事。

「えがお」というタイトルの「のりあき後援会報第 1 号」を発刊しました。いろいろなご批評も頂戴しているのですが、お手紙やお電話でお礼や励ましの言葉をいただいています。

「あれから(投票後)、ずっとブログ続けていたんですね。また拝見しますよ」

「お気に入りに入れてあります。朝の日課です」

なかには、今後の防府に関しての提言などもあったりして、実は反響の大きさにちょっとビックリ。

初めてコーヒーを飲みながら、ブログを書きました。

太陽

2010年8月6日

きょうは、広島に原爆が投下された日。

祖母の親戚が広島にあり、小学生の頃はよく連れて行ってもらった。

原爆資料館(広島平和記念資料館)の記憶は、今も鮮烈である。

10時過ぎ、照りつけるまばゆいばかりの太陽の日射し。

華陽中学校の前を、急ぎ足でお盆勤めに向かっていると、「おはようございます。」「こんにちわ。」と響き渡る元気な声。

テニスのクラブ活動の帰りだろうか、自転車からの挨拶。

太陽の日射しを吹き飛ばすよう勢いである。

実に気持ちがいい、真黒に日焼けした笑顔が頼もしい。

ふるさと防府には、素晴らしい若者がいる。この若者に応えていける政策をふるさと防府は行っているのだろうか？

胸を張って言えるだけのトライをしているのだろうか？

ふと、そんな思いにとられる。

「太陽の日射しが強ければ強いほど、影も強く濃く映る。」

以前に作家の五木寛之氏の講演で聞いた言葉だ。

特に夏場は、ホッとするような影がありがたい。

モンローからの風

2010年8月5日



お盆のお勤めから帰ると、本堂の方から、何やらにぎやかな声。

そういえば、アメリカ、ミシガン州、モンロー市からの交換留學生がお寺の見学と生け花で来られることを聞いていたのを思い出した。

早速本堂に入ると、もうほとんど生け花は終わっており、留學生たちは

本堂の仏様や荘厳を熱心に見てくれていた。

「日本文化を知る」との目的で

国際ソロプチミスト防府の方々が材料の用意、指導など、
すべて含めてお世話をされてのことであったが、
来日して実際の体験を通して日本の文化に触れる体験はやはり大事なことだと思う。

本堂内外のデザインについて興味を示してくれていたのが、とても印象に残った。
日本の文化や生活にふれたことで、今後も日本何よりも防府のことをずっと心に
留めおいて欲しいと願う。

そういえば、もうひとつの姉妹都市、韓国、春川市との交流は昨今あまり聞かないようにも思う。私の情報不足
だったら申し訳ないので、今年度の交流についてご存知の方があれば教えて欲しい。

見学

2010年8月4日

昨日、宮崎県日南市あがた幼稚園と系列の認定子ども園(保育園)の方々15名が見学に来られた。
中関幼稚園ときんこう保育園を見学され、特に幼稚園では公開保育とプロジェクト保育の実際を学ばれた。

昨年、全国から100名を超える理事長・施設長対象の公開講座をして以来、自園のスタッフを連れてきたい旨、
申し入れがあり、互いの日程調整が取れ、おいで頂けることとなった。

実は、見学に来てもらう方もありがたいことなのである。再度、足元から見つめなおすことができるし、整備も進む。

人は、何かきっかけがないと、なかなか動かない。
基本的に保守的なのだ。
この度も、外から見学という刺激があって、初めて動こうとする。

しかし、これからは、自己改革できること。
何よりも、自らが変革の能動者となりえなければ、
まちもひと、教育も福祉も経済も変わらない。

そのような人づくりをさらに目指していく。

おかげで、多くの感動の言葉と新たな気づきを残して宮崎に変えられた。
他のまちを訪ね、比較して、いいものは遠慮なしに取り入れていくことが
子どもたちに安心して渡せるふるさととなりえるのだと実感。

お母さんの涙

2010年8月3日

夕方、保育園園庭でお母さんとお子さんが一緒に抱き合うようにして座っておられた。

「こんにちわ」とご挨拶すると、お母さんが涙を流しながら、「子どもが保育園で私に手紙を書ってくれたのがうれしくて。」「保育園にいる時に私のことを思い出してくれたのがうれしくて。」と涙を話して下さった。

「いいお母さんだなあ、いい家族だなあ。」と素直に思う。一瞬のふれあいなのだが、私には大きな感動なのだ。お母さんのうれしい顔、お父さんのうれしい顔を、子どもは願っている。それを、伝えていただき、素敵な親子の心のやり取りが私どもの園で育っていることが、本当に素直にうれしい。

虐待・遺棄など親子のことが毎日のように話題にあがらないことはない日本。

「いい話も、もっと伝えてよ。精いっぱい頑張っていることももっと伝えてよ。」と大声で叫びたい気分である。

ステキなお話。ありがとうございました。



今日は、宮崎県の吾田(あがた)幼稚園・保育園の方々が、中関幼稚園と錦江保育園の保育スタイルの見学にはるばる来られた。

詳しくは明日・・・

「幼・保」通園と学力？

2010年8月2日

8月1日のブログでは、北欧の素敵な自然のなかで、個性を引き出しつつ自立への教育をしていることを紹介した。その矢先、家族が全国学力テストの結果公表のニュースを教えてくれた。

何と「幼稚園出身者は保育所より高正答率」などの、まことに嘆かわしいさみしい記事が多く新聞に掲載されていた。

北欧・デンマーク、森の幼稚園では字は教えない。国の法律でこの年齢では、教えるはいけないと決まっているのだ。人生を生きる過程で、その時期に何が必要か、社会全体に哲学があり、ある意味とても自由である。

首都コペンハーゲンで金融の第一線の仕事をバリバリしていた父は、自分が生まれ育ったふるさとの自然・森の幼稚園に子どもたちを入園させたくて、退職を決意したそうだ。地元での再就職はおそらく収入減とはなるが、「家族で生活する意味」を考えての選択であったように感じた。

さて、きょうの本論にもどそう。

このような記事を見て保護者はどう思うだろうか？

それ以前に、そのような調査の意味・必要性はあるのか、日本の内閣・官僚は何を思い、何を目的としてこのような調査・発表をしたのであろうか？

毎日新聞の記事には「幼稚園に通わせている親と比べ、子どもの勉強を見る時間が少ないのかもしれない」「保育所しか選べない家庭もある。保育所の何がダメなのか、どうしたらいいのか示してほしい」などの不安や不満を語っている。

こんな調査をするのであれば、全国学力テストなどは即刻廃止にすべきだ。学力テストの名のもとに、裏側では幼稚園と保育園を比較しようとする態度は、まさに差別感以外何物でもないであろう。それぞれの地域、家庭の状況があり、一概に言えないほど複雑な要素が現在の我が国の子育てにはある。大阪の二人の乳幼児遺棄事件のように、社会全般のさまざまな事象まで含めてできるだけ広範囲に対処している保育所側の精神的ショックは計り知れない。いかに、国が上から目線であり、現場主義でないかが一目瞭然である。

子育ての支援を相当な時間を費やし思いを持って対応している現場の保育所職員はどうこれを受け止めるであろうか？

まして、国の政策として、子育て支援や保育所待機児童を少なくしていく使命を課せられ、精いっぱい、積極的に子どものよりよい育ちを願い努力してきたことに対する国の答えがこれであれば、やはりあまりにもさみし過ぎる。

このことは、厚生労働大臣は、文部科学大臣に進退をかけて抗議するべき案件。ここで、何も行動かなければ今後の保育行政にも不安感を抱かざるを得ないのである。

予算がない、予算がない、そのことだけがマスコミを通じて流される。予算がなくても、せめてやる気だけは削ぐ

ことがない行政が求められている。国も地方も。



今日は、きんこうの高齢者部門の方々と高齢者福祉についての勉強会をしました。

とても明るく楽しいひとときでした。

森の幼稚園

2010年8月1日



プラネットベビーズというNHKの番組がある。

今週は、デンマークのロラン島の幼稚園。

今では世界から、見学者が訪れるほど有名な幼稚園になっている。

その幼稚園には園舎はない。集合場所からバスに乗って森に行くのだ。

森につくと、輪になって、歌を歌い、お話をする。

私どもの園で行っているサークルタイムだ。(サークル=輪になってお互いの顔を見ながら会話を進めていくスタイル)

その後は、森で遊ぶのだ。ミミズやカエルや虫を手でつかみ、大木の枝から吊るされたブランコで遊び、森で過ごす。

自然体験を経て、実証的に子どもたちの興味を学びへと導く。

自分で考える、自分で選択する。日本の教育に近年

もっとも欠けている概念である。

さらに、保護者自身が、保育の原点を、遊びの原点を、子どもの育つ原点をしっかりと把握し、それを良しとしている親がいることも、この教育が成り立つ重要な要因である。

子どもたちは、生活することで、自分で考え、決めていく力がついていく。

自立、自己決定をこの時代から育てていく。挑戦し乗り越えていき、自信をつけさせる教育の原点がここにはある。

私が目指している教育のスタイルとほぼ同じ考えである。防府という地方だからこそやっていたいかなければならないことがあるのではと思っている。

現在、森の幼稚園は、人気が高く入園待ちの状態なので、子どもが産まれるとすぐに予約を入れるそうだ。番組の最後で、お父さんと一緒に家の近くの野原で遊んでいた男の子が小さなお花を摘み、「お家を持って帰ろう」と言うと、「お母さんはその花を見るとなんて言うかな？」と子どもに問いかけるシーンがあった。

「お母さんは笑顔になる。」がその子の返事であった。

私たちが目指す人づくりとしての理想像はここなのだと思う。
防府の幼稚園・保育園の子どもたちにそうなってほしいと思いませんか？

今日は、夕刻から、親しい仲間が集まってバーベキューパーティ。私たち夫婦はほとんどおよばれ状態。でも、沈みゆく夕日に照らされながらも、どっしりと雄大な大平山を眺めながら、遠慮なしの会話のやり取り。

ひとしきり、お腹をいっぱいにした後は、ギターとベースの生演奏。何と、卒園児のお父様がギタリスト。この方がまた抜群にうまい。私たちの世代の曲、ビートルズ、エルビスプレスリー、ユーミンなどをジャズにしての生演奏。

笑顔になる。みんな笑顔になる。屈託のない笑顔と、時間と空間がある。本当に久しぶりにほっとする時間を頂戴した。

仲間に感謝。数々のご配慮に感謝。そして新たな出発点をつくってくれた仲間に感謝。

心がつながる、自己決定できる、自立したまちづくりは、人づくりから始まることを、多くの人に知ってほしい。